入選　　京都府　　齋藤 和彦 様　（60 代）

1981 年春、大学を卒業して、外資系の商社に就職することになった。

「卒業したら外国の会社に就職して、すぐにロスアンゼルスの駐在になるよ。」

と、両親に報告したら、最初に返ってきた言葉は、

「じゃあ、年金はどうするんだい」

だった。

その時はまだ 23 歳、40 年後の自分の老齢年金のことなど、考えも想像することすらできなかった。

開港してまもない成田空港からシアトルにむかって旅立つ日、故郷の信州からわざわざ見送りに来てくれた両親は、出発ゲートでの別れ際、

「国民年金だけは毎月入れておくからな、忘れるなよな。」

と、何度も言った。

この時両親が繰り返し呼びかけるように言った『忘れるなよ！』という言葉の本当の意味に気づくのは、それから随分とあとのことになってしまう。

米国の商社から旅行会社、ホテル会社と転職して、日本に帰ってきたのは、それから 15 年が経ってからのこと。日本から離れていたその間、ひと月として欠かすことなく、両親は、国民年金の支払いを続けてくれていた。海外で結婚もして、二人の孫とともに東京に戻り、日本の関連会社に入社、初めての厚生年金を支払うこととなった。

父親は昭和 2 年生まれ。旧海軍航空隊から復員して、当時の逓信省から電信電話公社に入局した。60 歳前にＮＴＴを早期退職し、のちに年金生活に入った。80 歳を越えた頃からその父が認知症を発症し、神経科病院からリハビリ病院、そして特別養護老人ホームへと治療、療養、転院を繰り返すこととなった。そして今は病院の療養病棟に入っている。顔を合わせればニコリとはしてくれるものの、おそらくは、誰が来ているのかはわかってはいない。自宅で療養介護だった父を施設に送り出してからすぐに、自らが認知症を発症した母親ともに、10 年を越す病院・施設生活となってしまったけれど、その長い期間の療養治療費用は、すべて二人の老齢年金だけで、賄うことができている。2 か月に一度振

り込んでいただく年金をそれぞれの施設、病院に振込支払いをするだけが、今の僕の役目。

成田空港での別れ際の、「忘れるなよ！」の言葉を今頃になって、噛み締めている。

「忘れるなよ、日本のことを！ふるさと信州と俺たち親のことを！」

自分も 65 歳の誕生日を迎え、自らの老齢年金を受給する歳となった。オレンジ色の年金手帳を手元に置いては、40 年前から続いた親のありがたみをあらためて、噛み締めている。

訳あって今は遠くに別れて暮らす自分自身の子供たちに、いつも会うたびに、聞いている。

「年金入ってる？ちゃんと支払ってる？」

いつの日か、また、自分を思い出してくれる、かもしれない、などと思いながら。